



亜細亜万神殿
ストウパ

ご挨拶

ご存知のことと思いますが、本年四月末に参道北詰の東側に「祈りの回廊・亜細亜万神殿」が建立されました。インドから東南アジアの多数の神仏や象徴が祀られ、その回廊の

北側中心には、昨年四月二十五日に発生した地震により大きな被害を受けたネパールのお寺を模したお堂を建てました。そして、このお堂の中にあるストウパには、お釈迦様の

誕生の地であるルンビニの砂が納められ、お堂と向き合う形で回廊の南側にある法輪を覆う屋根には、サーンティーの仏塔を模したストウパが置かれています。

須磨寺での四度にわたる「阪神・淡路大震災」の慰霊と復興を祈る、ネパール在住のチベット仏教僧による砂曼荼羅法要は、多くの方々に安らぎと勇気を与えてくれました。そしてネパールでは、五年前に「東日本大震災」の慰霊法要が多く国民の参加の下、大々的に厳修されたことを知りました。そこでこの度

青葉の笛だより

第 17 号

平成 28 年 7 月号

発行所：大本山 須磨寺

〒654-0071

神戸市須磨区須磨寺町4-6-8

TEL 078-731-0416(代)

<http://www.sumadera.or.jp/>

は、日本在住のネパールの人々にとって、故国の災害殉難者の慰霊と被災復興を願う、祈りの拠り所になり得たらと思います、この回廊の中心をネパール風の殿舎としました。

九州は熊本や大分、更には南米エクアドルにおける大地震や、世界各地で発生している自然災害は、甚大な被害と突然の悲しき別れを齎しています。また北アフリカや中近東においての、引き続き内戦・内乱は、幾万もの難民を発生させ、その混乱に乗じての無差別テロ、宗教教義の違いによる殺戮の続発など、否定と対立による塗炭の苦しみで喘ぐ人々を生み出しています。悲しみに寄り添い、対立無き融合と調和の世界が求められている今、この「祈りの回廊・亜細亜万神殿」の表す、存在の全てを抱合し尊ぶ曼荼羅空間が、遅滞たりといえども、融合と調和の世界実現に寄与するものと確信しています。

日本の諸仏諸神と「亜細亜万神殿」来着の諸仏諸神に、国土の安穩と世界の平和、風雨は順時して万民の幸福を祈ってまいりましょう。

合掌

大本山須磨寺 貫主

小池 弘三

十三佛に見守られて(4)

―釈迦如来(下)―

摩耶山天上寺貫主 伊藤 淨厳

二、十三仏の二尊としての釈迦如来

前号では、歴史上に実在したお釈迦さまと、その教えの要点をお話しました。今回は、十三仏の一尊としてのお釈迦さま、すなわち釈迦如来についてお話しします。

それでは、はじめに予備知識として、仏像ができるまでの信仰と礼拝の対象、仏像の起源などについて、少し記しておきます。

いうまでもなく、お釈迦さまがこの世に生きて説法されている時には、当のご本人がおられるので、礼拝の対象としての仏像の必要はありませんでした。ところが、悟りを開いて仏陀となられたお釈迦さまでも、人間である以上、諸行無常・生者必滅の理をまねがれることはできません。それで、釈尊の死によって、仏弟子や信者たちはよりどころを失って困惑し、悲嘆にくれました。そこで、彼らは釈尊にかわるよりどころを求めて仏像を造るようになったと思うでしょう。だが、インドでは長い間、仏像は造られませんでした。なぜでしょうか。それは、釈尊があまりにも偉大で、凡人を遥かに越えた尊いお方であつたので、自分たちと同じ人間のすがたで仏像にすることなど考えの及ばないことであり、また、不謹慎でもありません。

そのため、数百年の間は、蓮華菩提樹・

法輪・仏塔をはじめ、仏座や仏足石などが、釈尊に思いを馳せ、釈尊その人にかわるよりどころ、すなわち象徴（シンボル）として信仰礼拝されてきたのであります。

蓮華―釈尊の誕生の象徴

菩提樹―釈尊の成道（悟り）の象徴

法輪―釈尊の最初の説法の象徴

仏塔―釈尊の涅槃（大いなる死）の象徴

仏座―釈尊が坐られた座

仏足石―釈尊の足跡を型どつた石



青葉殿 釈迦如来像

だが、釈尊への思慕や信仰の念がより一層つり高まってきたのです。かくて、およそ西暦一―二世紀頃になると、自分たちにもつと身近で親しみやすく、より具体的な礼拝の対象を求めるようになり、ついに、人間に似通つたものとして、仏像が造られ、仏画にも描かれるようになりまして、もちろん、最初の仏像は釈迦如来であり、その後には造られるさまざまな仏

像の姿は、この釈迦如来が原型（モデル）になっているのであります。

ところで、釈迦如来が人間に似せて造られた像であるといつても、当然凡夫を超えた偉大な存在であり、釈尊の悟りと衆生教化の理想を具象化した仏像であります。従つて、それは尊像としての威厳と崇高さを示現し、智慧と慈悲に満ちて、信仰・礼拝・瞑想の対象となるにふさわしい特徴を具備した象徴であることはいうまでもありません。（蓮台や光背、さまざまな容姿や印相など）

それでも、初期の仏像は、あくまでも釈尊を思い描いたものであつたので、きわめて人間に近い姿で造られています。

それでは、釈迦如来の教えと、釈迦如来を信仰する功德・ご利益について記してみます。釈迦如来の教えは、仏教の教えの大もとである釈尊の教えがそうであつたように、つきつめれば、転迷開悟を教えるのであります。転迷開悟とは、迷いを転じて悟りを開くことで、人それぞれにひたすら修行の努力を重ねて、煩惱に基づく迷い（苦しみのもと）を捨て去り、悟りを開くことであります。

さらに、釈迦如来の方からいえば、抜苦与楽、すなわち衆生の苦しみを抜いて、この上ない幸せと樂しみを与えることを本誓（衆生救済の誓願）とされているのです。ちなみに、苦を抜くのは「悲」、樂を与えるのが「慈」で、これは仏さまの「慈悲」の徳のことであります。

なお、釈迦如来の印相（仏さまの内面の悟りを象徴する手の形）には、定印・

説法印・降魔印などもありますが、一般的にみてその基本的な印相は、施無畏と与願の印であります。施無畏印（無畏を施す印）とは、人々に何ものをも畏れない力を与える印相で、右手を上げ五指を伸べて掌を外に向けた、いわゆる手まねきの印相。与願印（願いを与える印）とは、人々のどんな願いでも叶えてくださる印相で、左手の五指を開いて、掌を上向きにして、左膝の上に置き、人々をあまねく受け容れる印相です。

次に、釈迦如来を信仰し修行するごどのようなご利益があるのでしょうか。それをひとことぐいえば、滅罪生善といふことになります。滅罪生善とは、煩惱と無知に起因する罪や障りを滅し、むさぼりや理不尽な怒りを起こすことのない悟りの境地に到達して、無上の安樂を享受できることなのです。これによって、私たちのさまざまな願いが自ずから叶うのであります。このように、ご利益は総じて私たちに幸せをもたらしてくれるわけですが、それぞれのお寺の由来によって、現世のご利益には違いがあります。家内安全、息災延命、学徳成就など、さまざまです。

最後になりましたが、二七日のお導師（守り本尊）である釈迦如来は、現世の人々に対すると同じで、亡き人のみ魂に転迷開悟の道を教え、抜苦与楽の境地へ導いてくださいます。すなわち、仏教の基本的なものの見方を教え、何ものにも束縛されず何ごとにも動じない、究極の安心（心のやすらぎ）の境地へと導いてくださるのであります。

四萬六千日燈明会 〜みあかり観音〜

四萬六千日とは観音様の縁日で、この日にお参りすると四萬六千日参詣したのに相当する功德を生ずると言われています。



須磨寺では、本堂において初盆精霊供養の法要を執り行い、引き続き境内にろうそくで形づくられた巨大な観音様のお顔、みあかり観音の前で読経し、皆様方の所願成就・萬霊供養をご祈念申し上げます。その後、本堂前において和太鼓の奉納演奏などの催しもございます。ご知友お誘い合わせてご参拝下さい。

一、日 時 八月九日 午後六時より

一、会 場 須磨寺本堂前

一、供養・ご祈禱料

ろうそく	一本	千円也
祈禱札	一体	三千円也
経木供養	一霊	三千円也

◎須磨寺本堂前寺務所にてお申し込み下さい。

夏・秋の行事案内

◇七月・・・・・・・・・・・・・・・・

○三十日(土) 子ども寺子屋修行

◇八月・・・・・・・・・・・・・・・・

○九日(火) 四萬六千日燈明会 みあかり観音

〔午後六時〕須磨寺 本堂

○十二日(金) 孟蘭盆会

○十五日(月) 盆大施餓鬼法要 〔午前十時〕本坊客殿

○十七日(水) 青葉殿孟蘭盆会法要

〔午前九時・正午・午後三時〕青葉殿

○十九日(金) 盆大施餓鬼法要 〔午後二時〕櫻寿院本堂

○二十日(土) 盆大施餓鬼法要 〔午後二時〕蓮生院本堂

○二十日(土) 二十一日(日) 盆大師(ご縁日)

◇九月・・・・・・・・・・・・・・・・

○十九日(月) 二十五日(日)

彼岸会 特別護摩祈禱

〔午前十時・午後二時〕護摩堂

○二十日(火) 二十一日(水) 彼岸大師(ご縁日)

◇十月・・・・・・・・・・・・・・・・

○二十日(木) 二十一日(金) 大師縁日

◇十一月・・・・・・・・・・・・・・・・

○二十日(日) 二十一日(月) 大師縁日

○二十三日(水) 秋の大祭 須磨の火祭り

柴燈大護摩供

〔午前十一時〕須磨寺境内

桜寿院・秋の行事のご案内

毎年、少しずつ信者さんと共に拝み・学び・体験してまいりました桜寿院の「寿会」。特に会員制などはありません。お大師様を信仰している方々とともに、楽しく一時を過ごせればと思います。今回は鷺尾知子先生をお招きしまして、ヨガ教室を行います。日ごろの心と体の疲れを癒して頂けたら幸いです。

場所 桜寿院

日時 十月四日(火) 午後三時三十分 ヨガ体験教室

十月四日(火) 午後七時 ヨガ教室

十月九日(日) 午後三時三十分 ヨガ体験教室

十月二十六日(水) 午後三時三十分 ヨガ体験教室

十月二十六日(水) 午後七時 ヨガ教室

十月二十九日(土) 午後三時三十分 ヨガ体験教室

(各回 定員十六名、受付は各二十分前より、講習時間は時間の予定です)

定員 各回 十六名

会費 一回お一人 五百円

申込 須磨寺 桜寿院 電話 〇七ハ―七三―〇九一八

定員になり次第、締め切らせて頂きます。

諸注意

動きやすく締め付けない服、大判のタオル又はヨガマット、飲み物、温度調節のための羽織りものがあると便利です。レッスンの約二時間前までにお食事は済ませておいてください。平日夜の部は、少し本格的に行います。

●特別講師 鷺尾知子先生 プロフィール

ヨガは心と身体を繋ぐツールのようなもの。身体はもとより、心の平穏や安らぎ、深い呼吸によるリラックスの効果などその恩恵は計り知れません。そしてそこにはいつもニコニコ笑顔で過ごせる暮らしのヒントが詰まっています。どうか難しいことは抜きにして、のびのびとお身体をほぐしながら、ご自身と静かに向き合う午後のひとときを一緒に過ごせたらと思います。どうぞよろしくお願い致します。

台掌

・シヴァナンダヨガティーチャー

・トレーニング卒業

・シヴァヨガ養成講座修了





大本山 須磨寺 祈りの回廊—亜細亜万神殿落慶



去る四月二十五日、「祈りの回廊—亜細亜万神殿」落慶法要並びにネパール大地震復興祈願法要を厳修致しました。亜細亜万神殿は、東南アジア、特にカンボジアやインドネシアを中心に、アジアの秘宝とも言うべき三十八体の石仏と、壁レリーフ一点を展示しています。これらの石仏は、京都の古美術商の福丸慶久氏によって当山に奉納されました。工事が進む中、昨年の四月二十五日にネパールで大地震が発生しました。須磨寺が日本在住のネパールの方々への祈りの拠り所となるよう、万神殿の本尊として、ネパールカトマンズにありますスワヤンブナート寺院を模したストゥーパを造立しました。ストゥーパの中には、釈尊生誕地ルンビニの砂が納められています。そしてストゥーパの前には釈尊誕生仏を祀り、周りには経文の入った摩尼車を巡らし、正面には仏足石を安置して祈りの中心としました。

法要当日は晴天に恵まれ、午前十一時より導師である管長、職衆、御詠歌講が練供し、約二百五十名の参列者が待つ亜細亜万神殿に入堂しました。回廊を散華行道し、御詠歌奉詠の後、管長猊下が慶讃文を奉読しました。最後は、参拝者とともに観音経を誦誦する合同法要を営みました。続いて来日中でありましたネパールの高僧ラトナ・バジユラ・リンポチ猊下を迎えネパール式の法要が管まれ、震災復興を祈りました。

法要後は式典となり、管長より「この場を皆様が集まる心休まる場にしてほしい。」と挨拶がありました。そして、震災復興とネパールでの学校建設の為の義援金が、管長からネパール商工会議所連盟名誉通商特使デブマン・ヒラチャン氏に贈呈されました。最後に須磨寺檀家総代前田豊彦氏の謝辞をもって閉式となりました。

午後二時から、ミュージシャン サンディハの音楽奉納コンサートが行われ、多くの参拝者が美しい音色に聴き入っていました。

石像安置は神戸市立博物館学芸員・川野憲一氏の指導、造形計画は紺野東吾氏、建築設計は北風建築事務所、施工は鹿島道路株式会社、ストゥーパ荘嚴は須磨寺大仏師・山高龍雲師、そして多くの関係の方々のおかげをもちまして、無事落慶することができました。ここに改めて感謝申し上げます。

須磨の火祭り 火渡り修行

須磨の火祭りは屋外での柴燈大護摩供で、この一年を無事に終えた事を仏様に感謝し、火渡りによって身を清め新しい年を迎えるために晩秋に行います。火渡り神事とは火生三昧ともいわれ、柴燈護摩の終わりに火の上を渡る荒行です。浄火により災厄を破い福を招くといわれております。特に来年厄年を迎える方は、厄難消除のために、火渡りをして身を清め、新年をお迎えください。入壇（火渡り）の方は当日お札、行者手ぬぐいをお渡しします。



記

一、日 時 十一月二十三日（水・祝） 午前十一時開白

一、会 場 須磨寺境内 ※荒天時は、護摩堂にて

一、ご 祈 禱 特別祈禱札 一万円・三万円・五万円

添護摩木 千円

一、火 渡 り 厄年特別火渡り 五千元

一般火渡り 二千元（先着百五十名）

※火渡り神事は荒行でございます。多少のやけどもございませう。申込書の注意をよくお読みのうえお申し込みください。

一、お申し込み 須磨寺派各寺院にお申し込みください。

平成二十九年 厄年表

平成 十一年生（女性）	厄年	平成 五 年生（男性）	小厄
昭和六十一年生（女性）	前厄	昭和五十二年生（男性）	前厄
昭和 六十年生（女性）	本厄	昭和五十一年生（男性）	本厄
昭和五十九年生（女性）	後厄	昭和 五十年生（男性）	後厄

いろはまつり

神戸真言宗連合会が主催となつて、毎年六月十五日にお大師様の生誕をお祝いする「いろはまつり」が三宮の国際会館に於いて行なわれます。第一部は「奉讃詠歌舞踊大会」となっており、各講が御詠歌や舞踊を披露します。須磨寺御詠歌講も二曲御詠歌を奉納されました。第二部「式典」では、神戸市内真言宗寺院の住職・副住職が総出仕で法要が営まれます。第三部は毎年内容が変わりますが、今年は「曼荼羅の響」と題して、金剛流合唱団の方たちによる御詠歌公演が行われました。数十名による美しい御詠歌にご来場の方々は感動されていました。最後の第四部は、毎年恒例の僧侶による劇団「あじのこ」による演劇です。今年の演目は『石堂丸』でした。須磨寺からは、本坊副住職小池陽人、蓮生院住職富永龍弘、正覚院副住職朝倉経義が出演しました。一日盛沢山の内容で、ご来場くださった皆さんの方たちとお大師様の「ご遺徳を偲び、心安らぐひと時を過ごしました。」



劇団あじのこ

今回、須磨寺御詠歌講で参加されました亀谷詠弘さんの体験談を掲載します。

須磨寺講は昨年九月より新しく船出を致しました。現在二十名の方が御詠歌教室に入講して下さっております。先生は山本文昭先生で西区の最明寺のご住職様であり、高野山の修行道場の先生もされています。大変立派な先生で授業もおもしろく皆一生懸命学んでおります。今回「いろはまつり」に参加して下さった方は十四人で、その内以前からの講員は五人でした。



須磨寺御詠歌講

二回出演致しましたが、一回目の曲は「観音大慈」でした。和讃で、観音様が苦海にあえぐ私たちを慈愛の御手をさしのべて救って下さるという曲です。二曲目は「須磨寺第一番札打和讃」で「世に響く 青葉の笛の名にぞ聞く 須磨のみ寺の松風の声」という須磨寺の御詠歌を元に作られています。一年を通して須磨寺の行事の折には必ずこの曲をお唱えします。

今回二曲とも皆さん頑張つて大きい声でお唱えて下さいましたので好評を頂きました。日頃の練習の賜物だと思ひます。これからも新しい曲に向かって精進致したいと思います。山本先生は月に一度来て下さいます。毎週木曜日は一時～三時まで先生に教えて頂いたことを皆で復習致します。にぎやかで明るく楽しいお教室です。お寺のお座敷で美しいお庭を眺め乍らのおけいこは心が洗われます。

初心者の方も大歓迎です。是非一度足をおこび下さい。一同心よりお待ち申し上げます。

須磨寺御詠歌講

代表 亀谷詠弘

教室…毎週木曜日 一時～三時
寺務所へお越し下さい。ご案内致します。

須磨寺の歴史(十七)

― 御開帳

須磨寺の本尊は聖観世音菩薩です。聖観世音菩薩は三十三の姿に変化して人々を救うという信仰がある為、須磨寺では三十三年ごとに本尊の御開帳が行われてきました。

『当山歴代』(須磨寺歴代住職が書き紡いだ古文書)を見てみますと、須磨寺における御開帳の初出は大永六年(一五二六)の記事ですが、その後はしばらく記述がなく、江戸時代に入ってから世の中が平穏になってきた正保五年(一六四八)に百二十年ぶりの御開帳を行い、「貴賤群衆して耳目を驚かす」という記事が出てきます。その後は延宝八年(一六八〇)、正徳二年(一七一二)、延享二年(一七四五)と三十三年ごとに二月十八日から四月八日までの約五十日間、御開帳をしたという記録が残されています。

(『当山歴代』の記事は宝暦二年(一七五二)十月二十五日までしか残されていないので、その後は不明。)

その中で延享二年の御開帳時の記事が一番充実しており、御開帳前年の延享元年(一七四四)の



須磨寺本堂内陣

記事には、寺社役人、西須磨・多井畑庄屋役人、伏見・堺奉行所、高野山蓮華三昧院、尼崎・兵庫・加古川・姫路・明石各所に使いを送り、翌年に御開帳を行うことと、御開帳を宣伝するための立て札を立てる許可を求めた記事があります。そして御開帳が行われた延享二年にも御開帳の準備のことや、御開帳時の法要、参詣者の賑わい、御開帳の間境内で辻打芝居が行われたこと、茶屋を出したことや境内での乱暴狼藉を禁止したこと、閉帳時に大阪両御番所に報告を行ったこと、また御開帳が終わった後の四月二十二日に高野山蓮華三昧院に年始の挨拶を兼ねて閉帳の報告をしたとの記事があります。

これらの記事を見て分かることは、御開帳の時には出店が出て大勢の人が集まり、今で言えばイベント化しているということ、そして御開帳の宣伝を西須磨や多井畑などの地元だけではなく、伏見や大阪、加古川に明石、姫路にまで出しているということ、当時それらの地域からも須磨寺に参詣人が来て賑わっていたという事が分かります。

次回は江戸時代を通じて須磨寺で行われた開山上人や敦盛の御遠忌がどのようなに書かれているのかを検証し、そこから分かる江戸時代の須磨寺の様子をみてゆきたいと思えます。

今年の境内整備事業

記

一、八角堂(経木供養所の建て替え工事)

工期 平成二十八年九月下旬着工

平成二十九年十二月完成予定

施工 株式会社 金剛組

旧納骨堂であり、現在の経木供養所は、屋根など損傷が著しく老朽化が進んでいます。この度、建て替えを行い、新たに八角堂を建立することとなりました。工事完成までの間、経木供養は護摩堂向かい側の仮設の供養所にて行います。しばしの間ご参拝の方々にはご不便・ご迷惑をおかけ致しますが、ご了承下さいますようお願い申し上げます。



八角堂 完成予想図

平成二十八年忌一覽

一	周忌	平成二十七年
三	回忌	平成二十六年
七	回忌	平成二十二年
十	三回忌	平成十六年
十三	回忌	平成十二年
十五	回忌	平成六年
二十	五回忌	平成四年
二十七	回忌	平成二年
三十三	回忌	昭和五十九年
三十七	回忌	昭和五十五年
五十	回忌	昭和四十二年
百	回忌	大正六年

献金のご報告

東日本大震災 平成 23 年～平成 28 年	¥2,725,200	ネパール大地震 (西方マンダラ展)	¥585,797
熊本地震	¥132,000	(内訳) 物品売上の 50% みなさんの献金 砂曼茶羅 DVD 売上の全額	¥367,330 ¥201,467 ¥17,000
おぎゃー献金 平成 21 年 7 月から平成 27 年 12 月まで	¥373,946	ご献金に感謝申し上げます。	
関東水害	¥77,000		

正覚院 永代供養堂

去る、平成二十八年一月十七日に正覚院の参道を隔てた東側に新しく永代供養堂を建立致しました。堂内には御本尊様として修行大師様をお祀りしており、各家ごとに仕切りを付けた個別納骨棚を百六十八棚

設けております。この個別納骨棚には一棚あたり二霊から四霊までの御遺骨を納めることができます。又、御本尊様の下に御遺骨を安置できる納骨所も設けております。

核家族化している現在、時代とともに先祖代々のお墓から家族、夫婦、個人だけのお墓という考えに変わってきています。

ここ最近では、檀信徒、参拝者からの永代供養に関するお問い合わせやご要望が多数あり、この度新しく永代供養堂を建立する事となりました。

昨年の十月に神戸市からの認可をもらい工事を着工、本年一月十七日に無事完成、お披露目の落慶法要を檀信徒、工事関係者多数ご臨席のもと執り行いました。

只今、納骨棚、納骨所の受付を致しておりますので、ご検討の方は左記の連絡先までお問合せ下さいませ、宜しくお願い申し上げます。



須磨寺正覚院

△連絡先▽ 078-731-0374

090-3652-7916

合掌

一絃須磨琴保存会

正力松太郎賞

児童教化功労賞

受賞



去る五月三十一日、東京グランドホテルにて「第四十回正力松太郎賞」の授賞式が行われました。今回は本賞、青年奨励賞に加え、第四十回を記念し児童教化功労賞が設けられ、須磨寺で昭和四十年に発足した一絃須磨琴保存会が同賞を受賞しました。正力松太郎賞は、公益財団法人全国青少年教化協議会が、仏教精神に基づき青少年・幼児の健全な育成に貢献した個人・団体に与える賞です。今回、一絃須磨琴保存会が地域や小中学校の子供たちへ須磨琴を伝承してきた活動が認められ、受賞に至りました。須磨琴の演奏技術を教えるだけでなく、礼儀作法や須磨琴の歴史なども教えており、長年にわたって活動してきたことを評価して頂きました。

仙師逍遙

須磨の海岸通りに泰山木の白い花が開くと、空も雲ももうすっかり夏模様です。開け放した窓から入る緑の風が、膝の上の木屑をさやさやと散らして、工房の板の間が一年で一番心地良く感じられるのもこの頃です。室内が中心となる座職の日常は、ともすれば季節に追い越されがちとなります。美しい四季を持つ国に住んで、日々の出来事を振り返る時、季節は時間とともにとても沢山のメッセージをのこしてくれていることに気がつきます。

あれは何年前のことでしょうか。西宮市内のある特殊硝子製作所を訪ねたのは、やはり泰山木の花が咲く頃でした。

当時、工房では須磨寺の護摩堂改修に伴い、ご本尊の不動明王三尊の製作を承っていました。総丈九尺、等身大を超す御本体は極彩色仕上げ、お不動様の目には玉眼が嵌入かんじやうされます。玉眼とは、お仏像の目に水晶やガラスや玉石を挿入することで、鎌倉期に盛んになった技術と伝えられています。その玉眼の大きさに見合う水晶の入手が困難で、硬質ガラスの技術者を探していたところ、知人から適任者と紹介されたのが工芸作家の有田さん。

ガラス工芸の楽しさを語る若くキラキラした目を見ながら、訪問の要件をお話すると即座に「是非協力させてく

ださい」とのご返事を頂き、それから何度も試作品の製作を経て、希望に沿ったとても良いものが出来上がりました。

有田さんは福島県出身。大学を卒業後、商事会社に勤務。ところがふとしたことで出会った沖縄の琉球ガラスの美しさに魅せられ、周囲の反対を押し切って退社。ガラス工芸の世界へ。小樽の硝子工房で技術を研鑽したあと、関西の硝子製作所に入社、今に至っているとか。そしてこれはずいぶんあとになって聞いた話。

じつはその間に転職がもとで父上と大喧嘩の拳句、勘当されて、ただ一人の応援者だった母上が亡くなられてからは、実家には出入りも儘ならぬ状態になっていたそうです。

お不動様は平成二十四年の早春、護摩堂と時を同じくして完成。

落慶法要と開眼法要が執り行われたのは月が替わって、快晴の四月二十八日。

有田さんには記念のために撮影した全身像に、お不動様のお顔のアップの写真添えてお送りしました。

それはやはり有田さんにとっても望外の喜びであつたらしく、母上の三回忌に帰省した折には持って帰り、法事の席上で披露したところ、一座の方々がとても感激して大喜びしてくださったと電話を頂きました。

残念ながら肝心の父上とは打ち解けるまでには至らずに残りだったが、有田さんの帰った後、「お父さんは写真をコピー

して親戚に配り、自分でも大切そうに飾っているよ」と、妹さんから知らされたそうです。そしてその半年後、突然、かつてないことに父上から「大阪の知人の結婚式に招待され関西で一泊して、一日だけ時間が取れた」と、予想もしなかった嬉しい電話が入り、「それじゃ、京都でも案内しようか」そう言う有田さんの言葉に返ってきたのは「須磨寺に行きたい」の返事だったそうです。

須磨寺の快晴の一日。本堂から護摩堂へ。そしてお不動様の前に座つて、長い無言のうちに「良かったな」の一言。有田さんの手をとって涙を流されたそうです。

人の世の縁の不思議は、語り尽くすことはできません。けれど、目には見ることのできない優しい金傘のもとで日々暮らしていること、そしてその幸せをつくづく感じます。

完成から四年。お不動様は幾たびもの護摩行を経

ることで一段と容色に輝きを増し、眼光ますます力強く、この世の全てを見てくださっています。

空に咲く蓮華の、泰山木の花のように。

須磨寺大仏師

山高龍雲



須磨寺 護摩堂本尊 不動明王